

ニンフェアール 新シリーズ
イマージュ《音・詩》第1回公演
- ヴィクトル・ユゴー編 -

所克頼（サクソフォン）
数森寛子（フランス文学・お話）
伊藤美由紀（作曲・お話）

2015.2.8（日）15:30 開演

主催：5/R Hall & Gallery、ニンフェアール
後援：名古屋芸術大学音楽学部
アリアンス・フランセーズ愛知フランス協会

ご挨拶

本日はお忙しい中、ニンフェアール新シリーズ・イマージュ第1回公演にご来場頂き、有り難うございます。

新シリーズ《イマージュ：音・詩》公演では、フランスの詩人による作品からインスピレーションを受けて作曲された新曲を発表するとともに、その音楽の源泉となった作品の解説を行っていく予定です。第1回目のヴィクトル・ユゴー編では、ユゴーの詩《夢想の坂》のイマージュから、伊藤美由紀が、アルトサクソフォンの為の作品を作曲し、ユゴー研究を専門とする数森寛子による詩の解説により音楽と詩との関係を読み解いていきます。また、ベルギーに亡命していたこともあるヴィクトル・ユゴー（1802-1885）と、同時代に活躍していたベルギーの楽器製作者であるアドルフ・サククス（1814-1894）により考案されたサクソフォンに焦点をあて、サクソフォン奏者の所克頼とプログラム構成致しました。フランス人作曲家の作品を中心に、ソプラノサクソフォン、アルトサクソフォン、バリトンサクソフォンの作品を交えてお送り致します。時代背景、文化背景のイマージュから、音楽を堪能していただきたいと思っております。

本年度ニンフェアール第11回定期公演は、6月21日（日）に佐藤紀雄さんと、5/R Hallで、エレキギターに焦点をあてたユニークな内容を考えております。また、皆様にそちらの公演でもお会いできるのを楽しみにしております。

2015年2月8日

ニンフェアール

プログラム

Programme

1. マラン・マレ：『ラ・フォリア』から ソプラノサクソフォン
Marin Marais (1656-1728) : Extraits des *Les Folies d'Espagne* (1701)
2. ポール・ボノー：『ワルツ形式によるカプリス』 アルトサクソフォン
Paul Bonneau (1918-1995) : *Caprice en forme de Valse pour saxophone alto* (1950)
3. ドビュッシー：『シランクス』 アルトサクソフォン
Claude Debussy (1862-1918) : *Syrinx* (1912)
4. ジェラルール・グリゼー：『アヌビ・ヌー』バリトンサクソフォン
G rard Grisey (1946-1998) : *Anubis et Nout pour saxophone baryton* (1990)

休憩

5. 伊藤美由紀：『夢の坂』 アルトサクソフォン（世界初演）
Miyuki Ito: *La Pente de la r verie pour saxophone alto* (2014) (Premi re mondiale)
6. ニコロ・パガニーニ：『24の奇想曲』から9、18、24番 アルトサクソフォン
Niccol  Paganini (1782-1840) : Extraits des *24 Caprices* (1800-1810)

出演：所克頼（サクソフォン）

Katsuyori Tokoro, saxophone

プログラムノート

1. マラン・マレ：『ラ・フォリア』から (1701)

フォリアとは、イベリア半島起源の 3 拍子の緩やかな舞曲で「狂気」という意味を持つ。もともとは騒がしい踊りのための音楽であったと窺われるが、時代を経て優雅で憂いを帯びた曲調に変化し、変奏曲形式で演奏することが広まった。本日は、主題と 25 の変奏曲から成るこの曲を抜粋してお送りする。コレッリ作曲のものがおそらく一番有名だと思われるが、ほかにもリュリ、スカラッティ、ヴィヴァルディ、リスト、ラフマニノフなどの作曲家の作品もある。

◆ マラン・マレ (1656-1728) : フランスの作曲家、指揮者、ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者。幼少のころから音楽の才能を認められ、パリ第一の音楽教育機関だったサン=ジェルマン=ロクセロワ教会の聖歌隊に入る。 (所克頼)

2. ポール・ボノー：『ワルツ形式によるカプリス』(1950) アルトサクソフォンの為の

華やかなワルツが色々な手法で描かれている無伴奏アルトサクソフォンのための作品。1950 年に作曲され、ミュールに献呈された。特殊奏法は使われていないが、細かな半音進行や大きなラインでの半音進行、音域を満遍なく使った大幅な跳躍など難易度が高く、効果的な音響を想定して作られている。

◆ ポール・ボノー (1918-1995) : フランスの作曲家。パリ音楽院でアンリ・ビュッセルに作曲を学ぶ。サクソフォンの曲は、このカプリスの他に、組曲、ジャズのエスプリを持った演奏会用小品、協奏曲がある。ボノーは「サクソフォンの神様」マルセル・ミュールと一緒にサクソフォンを学んだこともあり親交もあった。 (所克頼)

3. ドビュッシー：『シランクス』(1912)

この作品は、1913 年に無伴奏フルートのために書かれ、フランスの名フルート奏者、ルイ・フルーリーに献呈された。シランクスとは、ギリシャ神話のニンフにしてアルテミスの従者、シユリンクスの名をフランス語読みしたもの。彼女は、牧神パンに一目惚れされてにじり寄せられ、恐怖に駆られて逃げ惑ううちに、ラドン川のほとりで逃げ場を失い川の妖精に祈って葦に姿を変えたとはいえられている。葦になったシランクスの声に聴き惚れた牧神パンは「少なくともあなたの声と共に居ることができた」と喜び、その葦でパンフルートを作った。今回演奏するにあたり、ソプラノサクソフォンにするかアルトサクソフォンか、原調のままかなど、いくつかのパターンを試し、その中で一番妖艶で曲の魅力が表現できたと思われたものを選択した。

(所克頼)

4. ジェラルール・グリゼー：『アヌビ・ヌー』（1990）バリトンサクソフォンの為の

この作品は、1983年にクラリネット奏者のハリー・スパルネイの為に書かれ、その年に亡くなったグリゼーの友人であるカナダ人作曲家のクロード・ヴィヴィエ(1948-1983)に捧げられている。コントラバス・クラリネットの為に書かれた作品であったが、1990年に本人によりサクソフォン奏者のクロード・ドゥラングルの為にバリトンサクソフォンあるいは、バスサクソフォンで演奏できるように改訂された。フランス語タイトルの『アヌビ』と『ヌー』は、古代エジプトの『死者の書』の中の神である。アヌビス神は、犬のような頭部をもち、ミイラづくりの冥界の神であり、この世とあの世の間をつなぐ。ヌート神は、死者を守護する天空の女神である。第1部の『アヌビ』では、基音の周波数で除算されたサブハーモニックの部分音を中心に使用し、2部の『ヌー』では、自然倍音の部分音を使用している。

◆ **ジェラルール・グリゼー** (1946-1998) : フランス、ベルフォール生まれ。メシアン、デュティユ、リゲティ、シュトックハウゼン、クセナキスらに師事する。ミュライユらとともに、現在も活動を続ける現代音楽アンサンブルであるイティネレールを創設し、スペクトラル楽派の第一人者の一人である。 (伊藤美由紀)

5. 伊藤美由紀：『夢の坂』（2014）アルトサクソフォンの為の（世界初演）

この作品は、ユゴーの哲学が凝縮された難解な詩である『夢の坂』からインスピレーションを得て書かれている。宇宙の万物の根源は数であるとするピタゴラス的な考えを含み、時間と空間の中に永遠という精神世界を見いだす。最初のセクションでは、冒頭4小節の音形が4回、装飾されたオブジェが挿入されながら変形されて繰り返される。エンディングにも、同じ音形が数回繰り返される。このように似たような音形が少しずつリズムを変えながら伸縮をすることで、ユゴーの世界を表現しようと試みた。所々に、ユゴーの詩のフランス語の断片を音楽に挿入し、音響的效果としても扱っている。 (伊藤美由紀)

6. ニコロ・パガニーニ：『24の奇想曲』から9、18、24番（1800-1810）

24のカプリスは無伴奏ヴァイオリンのために作られ、技巧的な要素が盛り込まれた難曲。本公演では、以下の3作品をアルトサクソフォンにより演奏する。

- ・第9番 優雅な重音で書かれたこの曲を、和声感やテンポ感を失うことなく装飾音符に置き換えての編曲。
- ・第18番 ホルンのようなファンファーレで始まり、軽やかで分かりやすいスケールを経て、再びファンファーレで幕を閉じる。
- ・第24番 主題と変奏から成り立ち、24曲の中で最も有名。後に様々な作曲家がこのテーマをモチーフにして作品を作っている。

◆ **ニコロ・パガニーニ (1782-1840)**：イタリアのヴァイオリニスト、作曲家。5歳からヴァイオリンを弾き始め、13歳の頃には学ぶべきものがなくなったといわれ、そのころから自作の練習曲で練習していた。ヨゼフ・ダンハウザー作の「ピアノを弾くリスト」(1840)の絵画の中で、パガニーニとユゴーは横並びで描かれている。 (所克頼)



プロフィール

●所克頼(サクソフォン)

岐阜県出身。関高等学校卒業。名古屋芸術大学卒業。同大学定期演奏会、卒業演奏会出演。ヤマハ管楽器新人演奏会、岐阜県新人演奏会、岐阜市民芸術祭など出演。渡米し、インディアナ大学音楽学部パフォーマーディプロマ修了。帰国後、名古屋芸術大学大学院音楽研究科修了。第6回横浜国際音楽コンクール第3位。第3回飛騨河合音楽コンクール第2位(1位なし)。2009年よりリサイタルなど開催。ファブリス・モレティ、ユージン・ルソー、ジョナサン・ヒルトン各氏のレッスンを受講。これまでにサクソフォンを遠藤宏幸、雲井雅人、三日月孝、オーティス・マーフィーの各氏に師事。現在、フリーのサクソフォン奏者としてソロや室内楽での演奏や講師など東海地方を中心に活動。デュオ・ピクニック、クレセントカンパニー、妄想会議、竹林笹頼、竹森笹頼メンバー。

●伊藤美由紀(作曲)

愛知県立芸術大学、マンハッタン音楽院修士課程修了。コロンビア大学(ニューヨーク)で作曲をトリストラン・ミュライユに師事、博士号を取得。文化庁芸術家在外研修員として IRCAM (フランス国立音響音楽研究所)にて研鑽を積む。東京オペラシティ、ミュージック・フロム・ジャパン(ニューヨーク)、アタック・シアター(ピッツバーグ)、オニックス・アンサンブル(メキシコ)、愛知芸術文化センターなどからの作品委嘱ほか、カーネギーホール(ニューヨーク)、レゾナンス・フェスティヴァル(パリ)、ISCM 世界音楽の日々(香港)、国際コンピューター音楽会議(マイアミ)、SMC(ギリシャ、スペイン)、Re:New(デンマーク)をはじめ、世界各国のコンクール、音楽祭に入賞、入選し、国内外で作品の発表を続けている。国際交流基金助成により、CMMAS(メキシコ国立音響研究所)にレジデンス、ジェラシ・アーティストレジデンス(カリフォルニア)にて創作活動、作品発表も行う。ニンフェアール、JUMP の代表として自主企画公演を定期的に展開。『時の砂』が ALCD80 からリリース。スヴィーニ・ゼルポーニ出版社(ミラノ)から楽譜出版。『音楽現代』に「トリストラン・ミュライユの音楽的思考」ほか特集記事を執筆。現在、名古屋芸術大学、千葉商科大学、愛知県立芸術大学非常勤講師。www.miyuki-ito.com

●数森寛子(フランス文学)

専門は19世紀フランス文学。東京大学教養学部在学中に、グルノーブル第三大学(フランス)に留学し、単位習得。東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了、博士課程満期退学。ジュネーヴ大学(スイス)にて DEA(博士論文執筆資格)を取得。フランス政府給費留学生としてパリ第七大学に留学し、ヴィクトル・ユゴーの作品における廃墟の表象の研究により博士号取得。日本学術振興会特別研究員(DC2)、東京大学大学院総合文化研究科グローバル COE「共生のための国際哲学教育研究センター(UTCP)」特任研究員、千葉商科大学、埼玉工業大学、放送大学非常勤講師を経て、現在、愛知県立芸術大学准教授。Groupe Hugo (フランス、ヴィクトル・ユゴー研究会)会員。